

演題5. 薄層液体膜電解質濃度解析法の Sjögren 症候群患者固有唾液検査法への応用

2. 固有唾液の pH 変数と口唇部小唾液腺の生検結果との関連性

○佐藤 匡<sup>1)</sup>, 佐藤 方信<sup>2)</sup>, 横田 光正<sup>3)</sup>  
工藤 啓吾<sup>3)</sup>

岩手医科大学歯学部口腔生理学講座<sup>1)</sup>  
同口腔病理学講座<sup>2)</sup>  
同口腔外科学第1講座<sup>3)</sup>

Sjögren 症候群を示唆する所見の得られた患者群の固有唾液の pH および電解質濃度などについて解析し、前回の報告に追加すべき成績が得られたので報告する。

測定対象は、第3内科の膠原病外来受診者で、本測定に同意した116名である。安静時混合唾液の採取方法と採取積算時間の計測方法、および血圧と口腔温の測定については前回と同様である。唾液 pH は測定開始後1分の値 (pH<sub>1</sub>) であり、pH の初期変化量 ( $\Delta$ pH<sub>1</sub>) は CO<sub>2</sub> の逃散によってアルカリ側に変化した pH の5分値 (pH<sub>5</sub>) から pH<sub>1</sub> を差し引いて求めた。

データ解析は、測定件数116の資料より抽出した眼科および口唇部小唾液腺の生検にて Sjögren 症候群を示唆する所見の得られた SS++ 群31名について行った。その内11名は未治療群 (女性のみ; 平均年齢 50.8 ± 8.5 歳), 20名が治療群 (女性19名, 男性1名; 平均年齢 55.2 ± 13.6 歳) であった。対照群としては、骨粗鬆症研究資料の対照群より抽出した50歳代男女15名 (女性10名, 男性5名; 年齢 55.8 ± 2.9 歳) のデータを採用した。統計処理は異常データを除いた資料について行い、平均値の有意差は Student あるいは Welch 法の t 検定で判定した。

結果: SS++ 未治療群の固有唾液の  $\Delta$ pH<sub>1</sub> は対照群より有意に低値であり、Na<sup>+</sup> 濃度の平均値は対照群の2.3倍と高値であった。これに対して SS++ 治療群の固有唾液  $\Delta$ pH<sub>1</sub> と Na<sup>+</sup> 濃度は対照群とほぼ同等であった。一方、患者群の血圧と脈拍数は対照群とほぼ同等であったが、口腔温は治療群でやや低下傾向を示すものの0.4~0.6程度高値であった。また、患者群では唾液採取積算時間の遅延が顕著であり、唾液分泌の1指標である  $\Delta$ pH<sub>1</sub> との間に負の相関が認められた。

以上の成績は、治療によって SS++ 患者の唾液分泌が改善され、かつ唾液腺の円形細胞浸潤の軽減を示唆する口腔温上昇の下降が認められたこと、および唾

液分泌の改善の程度は  $\Delta$ pH<sub>1</sub> の値で把握できることを示唆している。

演題6. 両側の顎下腺に発生した唾石症の一例

○根反不二生, 佐藤 理恵, 佐々木武治  
星 秀樹, 杉山 芳樹, 関山 三郎

岩手医科大学口腔外科学第二講座

唾石症は、局所の炎症、唾液の停滞などが原因で唾液腺の腺体内または腺管内に生じる疾患である。顎下腺に生じることが多く、通常は片側性に発症し、両側性に発生するのは非常に少ないと言われている。今回われわれは、両側の顎下腺に発生した唾石症の一例を経験したので、その概要を報告した。症例: 37歳, 男性 初診: 平成8年10月30日。主訴: 両側顎下部の腫脹 既往歴: 平成元年, 作業事故による胸椎脱臼骨折・脊髄損傷にて手術を受けた。以来, 歩行できず車椅子を使用している。現病歴: 平成3年頃, 顎下部に腫脹および疼痛を認めたため, 抗生物質を服用し症状は改善した。その後, 時々, 疼痛を認めるも, 自製内であったため放置していた。平成8年10月頃より両側顎下部に腫脹および疼痛を認め, 抗生物質を服用するも症状が改善しないため, 某病院歯科を受診した。X線検査により, 両側顎下腺部に不透過像を認めたため, 当科を紹介された。口腔外所見: 両側顎下部に軽度の腫脹および圧痛を認めた。口腔内所見: 両側舌下小丘の周囲は軽度の発赤および圧痛を認めた。唾液の流出は両側顎下腺ともに認められず左側の開口部より排膿を認めた。触診により, 両側口底部に硬固物を触知した。X線所見: パノラマ X 線にて両側顎下腺部に境界明瞭の不透過像を認めた。顎下腺の造影所見では, 両側とも主導管のみ造影され, 唾石は腺体移行部から腺体内に存在していた。臨床検査所見: アミラーゼは 28 IU/l と低値を示しているほかは異常所見が見られなかった。臨床診断: 両側顎下腺体内唾石症 処置および経過: 入院のうえ, 平成8年11月22日全身麻酔下に両側顎下腺摘出術を施行した。唾石は両側とも腺体移行部から腺体内にかけて存在していた。摘出した唾石は, 右側のものが 19 × 12 × 9 mm で重さが 1.185 g であり, 左側のものが 14 × 11 × 7 mm で重さが 0.748 g であった。術後に顔面神経下顎枝の麻痺を認めたが一過性であった。術後6か月現在, 経過は良好である。